

【第 35 回個別発表抄録】

家族におけるジェンダーをめぐるコミュニケーション

—母性・父性に着目して—

萩臺 美紀（東北大学大学院）・二本松 直人（東北大学大学院）・奥野 雅子（岩手大学）

本研究は家族関係における問題、あるいは家族成員に生じる問題について、両親の性やジェンダーに着目し、母性や父性がどのような悪循環となっているのか、またどのように予防することが可能なのかについて検討した。

子どもの不登校やひきこもりなどの不適應問題では親子間のコミュニケーションや両親の協力体制によって問題解決を試みる場合が多い。Persons & Bales (1956) は、両親が持つ役割について、父親は子どもが社会に出て自立できるような道具的役割を行い、母親は家族関係の調整、子どもの養護などの表出的役割を担っていると述べている。つまり、母親は「受け止める」「見守る」といった母性的役割、父親は「教える」「指導する」といったような父性的役割を持つといえる。ところが、近年の家族関係については、父性論に見られるような家庭で父親が権力を持つように強くあるべきといった考え方は薄れ、家庭内における父親は弱くなったことが指摘されている（長谷川，2006）。また、女性の社会進出に伴い、女性の社会的地位も上がり、男女のあり方は益々多様化している。そのため、家庭内での子どもに対する母性的役割、父性的役割も変化しており、それに伴って生じる問題があると考えられる。

ところで、このような性別に付与される役割や社会的意味付けを「ジェンダー」という。ジェンダーとは「男はこう（あるべきだ）」「女はこう（あるべきだ）」といった社会的枠づけや、「男らしさ」「女らしさ」といった「らしさ」を指し、人間の社会や文化によって構成されたものである（伊藤・國信，2004）。ジェンダーの捉え方には、2つの考え方があるとされている。1つは、ジェンダーを個人が所有している性役割感や価値観であると捉える立場で（Bem, 1974）、もう1つは、ジェンダーは個人が持つものではなく、行うものであるという立場である（West & Zimmerman, 1987）。両者の視点を踏まえると、個人はある固定的な価値観や役割を持つ一方で、それをコミュニケーションとして表出し行動していると捉えることができる。また、長谷川（2006）は、「空間的ジェンダー論」の立場から、ある男性の男性性はまわりの者との相互影響によって維持され、ある女性の女性性を支えているのも相互影響であると述べている。そのため、ジェンダーは周囲との相互作用によって構成されている可能性がある。

心理臨床事例を概観すると、子どもの問題行動が生じている家庭では、父親が父性的役割のみを、母親は母性的役割のみを担うことで、母子は親密に父子は希薄になっていることが示されてきた。一方、父親と母親の両者が母性的でありすぎる、あるいは父性的でありすぎることによって、子どもの問題を維持している可能性が示唆されている。したがって、母性や父性の相補的なエスカレーション、相称的なエスカレーションが家族の問題を維持していると考えられる。そのため、家族や子どもの問題における悪循環を切断、あるいは、予防するためには、現在行われている家族内のコミュニケーションにおける父性や母性の悪循環に気づき、情動的に父性や母性を構成するため、現在とは異なるコミュニケーションを導入していくことが必要だと考えられる。